

記者は日本国際貿易促進協会訪中団の団員として中国を訪れた橋本大二郎氏に取材をした。なぜ橋本大二郎氏を取材したのか、それは、彼の経歴が特殊だからである。

彼は日本の元首相、橋本龍太郎氏の弟、現首相の鳩山由紀夫氏と小学校の同級生であり、さらに彼が豊富な人生の経歴を持っているためである。日本の有名なNHKテレビ局で20年間記者として働き、その後、マスコミをやめ政治に参加、16年間高知県知事を務め、かつて当時日本の歴史上最も若い県知事であった。

更に重要な原因は、高知県知事を務めた際、高知県と中国安徽省の姉妹省を締結するなど中国に対して友好的であるからだ。

一度も政界に入るとは思わなかった

1991年政界に入る前に、橋本大二郎氏はすでに20年間ものNHK記者生活を送っており、日本中のだれもが知っている有名なキャスターでもあった。NHK勤務期間中、彼は的確な取材をし、たいへん勤勉で、また司会者として、夜9時のニュース番組に社会部キャスターとして、いくつかの社会的ホットな話題について評論を行った。あの時、新聞記者の職業に従事したことは、橋本氏にとって一生の職業になるはずであった。しかし1990年のある日、一人の友人が彼の人生を転換させた。それは高知県知事の任期満了にともなう、知事選挙への出馬要請であった。この時、彼は真剣に人生の進むべき方向を考え始めた。彼が最後に高知県知事の立候補を決意したのは、たくさんのファンの存在と、選挙応援の草の根の署名運動の広がりであった。

橋本大二郎は日本の慶応義塾大学を卒業した。慶応大学は歴史悠久で、日本の早稲田大学と「私立双雄」と称されている。「日本の近代教育の父」、近代有名な啓蒙思想家、明治時代に傑出している教育家の福沢諭吉氏により創設された慶應大学は、日本で政界の名士を輩出した学府である。日本の元首相の犬養毅氏、橋本龍太郎氏、小泉純一郎氏、そして小泉内閣の財務大臣、農林水産大臣を輩出。また旧新進党党首、自由党党首、民主党党首を務めた小沢一郎氏などの多数の日本の政治屋を輩出している。

「兄はずっと私のアイドルだ」橋本大二郎氏は言う。「私が政治参与を決定した時、兄は私が積極的に人生を開拓することに対して支持を表し、私が政治に参加した後、兄は私に政治参与の経験と体得を伝授し、私にこの上ない協力と激励をしてくれた」橋本大二郎氏は3年前病気で亡くした兄、橋本龍太郎氏への懐かしさを口ずさんだ。

橋本大二郎氏は日本の首相、鳩山由紀夫氏と小学6年間の同窓生で、小さいときから鳩山氏の人柄を知っていたと言う。「鳩山氏は当時クラスの中でぱっとしない学生で、彼はあまり話をしないし、とても内向的な人だった」橋本大二郎氏は鳩山氏が首相に就任した際、「幼い時から今まで、鳩山氏は性格の面であまりに大きな変化はなく、彼が首相になった時、私は少し意外だった。意外と感じた後は、彼の平穩と執着の性格、および各種の圧力に耐える勇気で、こなしていくのではないかとも思った」と語った。

日本は「何事も長い目で見るべき」

記者と話し合う中で、橋本大二郎氏は「開放」、「度量」、「器量」のこれに類する形容詞を繰り返した。彼は記者対し、日本は「目を世界に向ける」、

「積極的に世界を見る」という事を欠いている。日本の発展を加速させるためには、1種の動力を急ぎ必要とし、1種の「全世界の視野」で方策を制定すべきで、保守的で進取の精神がなく、見識が狭く、少しも向上しようと努力しないというような対応をするべきではない。橋本大二郎氏は言う。今のグローバル化の中、創造精神を備え、本当に国際化し、「ままごと遊び」でなく、日本政府は力を尽くすべきであると。

橋本大二郎氏は1991年高知県知事になってから2007年の「甲を下ろして帰郷する」(退任)まで16年間務めた。彼は16年間の任期中、驚異的な革新がひとつあった。それは即ち、外国籍の人間の公務員への採用参加を認めたことである。(国籍条項撤廃)

1996年、日本《毎日新聞》はかつて1篇の記事を掲載した。それは日本の首相橋本龍太郎氏の弟、高知県知事橋本大二郎氏が事務公務員の国籍制限条項を廃止する声明を発表しましたという記事だった。橋本大二郎知事のこの声明に対して、高知県の人事委員会は反対意見を出し、そして何度も会議を開いて討論したが、なかなか結論は出なかった。このことについて、日本のその他の政府高官もこの職務採用の制限を容認することはできないと旨表明した。それはいったん外国籍所持者の公務員入りや、今後管理職に昇進する可能性があるようになると政府に対して不利益になる可能性がある。しかし、皆の一致した反対に直面し、橋本大二郎氏は依然として彼自信の主張を堅持し「主観的に外国人の態度を憶断し、疑う態度は、永遠に熟した論点が得られない」と言った。

橋本大二郎氏は革新理念を知事在任期間中貫いていた。

高知県知事を務めた時及びその後、橋本大二郎氏 10 回程、訪中している。その間、彼が回った中国省の最も多い場所は安徽省と山東省であった。

1985 年、高知県高知市と安徽省蕪湖市は「姉妹都市」を締結し、橋本大二郎氏が就任した後、1994 年に高知県と安徽省を「姉妹の省」として発展させた。そして 1998 年、高知港と山東の青島港が「友好港」を締結した。約 10 年間で、橋本大二郎氏は中国を往復し、主に日中の農業、港湾、文化交流のなど分野で友好的な発展に専念してきた。

中国の平和な発展が日本を含めた周辺の隣国に対して脅しを構成するかどうかについて橋本大二郎氏は、中国の強大な発展が日本に対して脅しを構成するとは思わなく、いわゆる「中国脅威論」は根拠のないものであると語る。彼は、中国の発展は大局の赴くところで、日中の友好も歴史の必然で、日中両国の共同の平和な発展は両国の根本的な利益に合うことだろうと言った。

橋本大二郎氏は「日本は中国との経済関係の発展を、企業の発展の面に留まらず、日本政府が中国との発展を国家戦略に高め、1つの全面的な発展戦略あるいは海外戦略を制定し、いっそう中国と交流を強めなければならないと思う」

橋本大二郎氏は、「今回の訪問を通じて、中国指導者が中国の発展に自信を持っていることを見た。このような自信があって、客観的に日中両国の現在存在している問題に対処し、そしてこれらの問題を解決するよう努めると思っている。」

「日中両国の交流及び発展は、民間だけで積極的に推進することがはるかに足りない。両国政府はこのような交流と発展を促進するためにさらなる努力しなければならない。」橋本大二郎氏は、「中日の青年間の交流はいつそう強化しなければならない、特に文化の面の交流が重要である。」と表した。

橋本大二郎氏が高知県知事を務めた期間中、1992年、高知県で「漫画甲子園」を開始した。甲子園は日本の高校野球の頂点を決めるための試合で、日本の高校野球チームの最も輝かしい憧れの場所でもある。漫画甲子園は、橋本大二郎の任期内に全国向けの1つのアニメ・漫画の競技場で、日本国内のアニメ・漫画の産業において一定の影響を持っており、すでに高知県の1つの新しい行事になった。

個人の愛好と趣味に言及する時、橋本大二郎氏は記者に、「私は私の兄の橋本龍太郎のように読書が好きで、登山、撮影、スキー、水泳、これらについて彼は何でも精通している。そして、最大の趣味は奥さんだと言い切る」。「電子ゲームも好きだ」と、この無党派の政治屋は最後に満面気楽に言った。

中国青年報 北京 12月12日電

日本高知县前知事：中国威胁论毫无根据

<http://www.sina.com.cn> 2009年12月13日 03:22 中国青年报



桥本大二郎

本报记者 戴长澜

记者采访到桥本大二郎，是因前不久他刚刚以日本国际贸易促进协会访华团成员身份来中国访问。之所以采访桥本大二郎，不仅仅因为其身份特殊——他是日本前首相桥本龙太郎的弟弟，与现任首相鸠山由纪夫是小学同学，还因为他有着丰富的人生阅历——在日本著名的 NHK 电视台当过 20 年记者，此后弃媒从政，任高知县知事 16 年，曾是当时日本历史上最年轻的县(省)长；还有一个更为重要的原因是他对华友好，在其任高知县知事期间，高知县与中国的安徽省确立了姊妹省。

曾经从未想过进入政界

1991 年进入政界前，桥本大二郎已经当了 20 年的 NHK 记者，并在日本家喻户晓，小有名气。在 NHK 工作期间，他不但经常以记者身份采访、出镜，颇为勤奋，还作为主持人，在每晚九点新闻中出现，就某些社会热点话题进行口播或发表评论。那时，从事新闻记者这一职业，对桥本来说，志得意满，可能就是终生的职业。但是 1990 年的一天，一

个意外信息让他扭转了人生的轨迹。他从朋友处获悉，高知县县长将到期离任，高知县将举行新一轮选举。这时，他开始认真思考人生奋斗的方向。当他最终决定参选高知县知事时，令他感到意外和欣喜的是，他居然有着大批拥趸和粉丝，有关助选的签名运动取得了成功，这为他最终问鼎知事积攒了人气。

桥本大二郎毕业于日本庆应义塾大学。庆应大学历史悠久，与日本早稻田大学并称为“私学双雄”，是由“日本近代教育之父”、近代著名启蒙思想家、明治时期杰出的教育家福泽谕吉创办，在日本是一个频出政界名流的著名学府。日本前首相犬养毅、桥本龙太郎、小泉纯一郎和小泉内阁的财务大臣、农林水产大臣，以及日本原新进党党魁、自由党党魁、民主党党魁小泽一郎等大批日本政客都毕业于该校。

“哥哥一直是我的偶像。”桥本大二郎说，“在我决定从政时，哥哥对我积极开拓人生表示了支持；在我从政之后，哥哥无私地向我传授从政的经验和体会，给了我莫大的帮助和鼓励。”桥本大二郎对3年多前因病去世的桥本龙太郎表示了怀念。

在评价日本首相鸠山由纪夫时，桥本大二郎说，他与鸠山是6年的小学同窗，从小学时起就非常了解鸠山的为人。“鸠山当时在班里是一个很不起眼的学生，他不爱说话，是一个很内敛的人。”桥本大二郎谈到鸠山当选首相时说，“从小到大，鸠山在性格方面都没有太大的变化，宣布他当首相时，我感到些许意外，但在意外之后发现，也许正是鸠山的这种沉稳和执著的性格，以及能够承受各种压力的勇气，帮助他坐到了首相的位子上，成为一个成功的政治家。”

日本应该“风宜长物放眼量”

在与记者交谈过程中，桥本大二郎反复地说着“开放”、“胸襟”、“胸怀”诸如此类的形容词。他告诉记者，日本缺乏一种“放眼世界的胸怀”，一种“积极看世界的眼光”，日本要加快步伐发展，就急需一种动力，应该以一种“全球视野”来制定决策，而不应该固步自封、鼠目寸光、毫无进取。在桥本大二郎看来，在当今全球化的进程中，具备创新精神，真正与世界接轨，而不是只谈“过家家”，是日本政府应尽力而为之的。

桥本大二郎自1991年成功问鼎高知县知事至2007年“卸甲归田”，共在任16个年头。在他任期16年间，桥本大二郎曾有一个惊人的创新之举：允许外籍人士担任公务员。

1996年，日本《每日新闻》曾登载一篇文章。文章说，在日本四国岛的高知县，时任日本首相桥本龙太郎的弟弟、高知县知事桥本大二郎发布了废除一般事务公务员的国籍条款限制的声明。针对桥本大二郎知事的这项声明，高知县人事委员会提出了反对意见，并多次开会讨论，但迟迟没有结论。就此事，日本的其他官员也纷纷表示不能放松对该项职务的录用限制，因为一旦外籍人士进入公务员队伍，有可能日后升为管理职位，这样将对政府不利。然而，面对众人的一致反对，桥本大二郎仍然坚持他的主张，并且说：“主观臆断和怀疑外国人的态度，永远都得不到成熟的论点。”

桥本大二郎的创新作为理念一直在他任知事期间贯穿始终。

中国和平发展不应被视为“威胁”

在任高知县知事期间及之后，桥本大二郎曾先后10次到访中国。其间，他跑的中国省份最多的就是安徽省和山东省。

1985年，高知县高知市与安徽省芜湖市建立了“姊妹城市”，桥本大二郎上任后，于1994年将高知县与安徽省发展为“姊妹省份”。1998年，高知港与山东的青岛港又结为“友好港”。十几年间，桥本大二郎往返于中国，主要专注于日中在农业、港口、文化交流等领域的友好发展。

在谈到中国和平发展是否会对包括日本在内的周边邻国构成威胁时，桥本大二郎表示，他不认为中国发展强大会对日本构成威胁，所谓的“中国威胁论”在他看来是没有根据的。他说，中国发展是大势所趋，中日友好也是历史的必然，中日两国共同和平发展符合两国的根本利益。

“日本政府放弃了对华经济援助(即 ODA，日本政府逐年减少，但目前对华经援并未全面停止——记者注)，现暂不论停止对华经济援助事件本身，事实上，除了政府经援外，日本企业也一直在这方面发挥着作用。但我认为，日本发展对华经济关系，不应该仅仅停留在企业的发展层面上，而应是日本政府把对华发展上升到国家战略高度上，制定一个全面的发展战略或者海外战略，进一步增强对华交流交往。”桥本大二郎说，“此行，我看到了中国领导人对中国发展充满了自信。我想，有了这样的自信，才能客观地看待日中两国目前存在的问题，并为解决这些问题作出努力。”

“日中两国不断交流和发展，仅从民间推动力这一层面积极回应还远远不够。两国政府应该为促进这种交流和发展作进一步的努力。”桥本大二郎表示，“中日青年领域的交流应该进一步加强，尤其是文化层面的交流。”

在桥本大二郎任高知县知事期间，1992 年，高知县创办起了“漫画甲子园”。甲子园是以前日本高中棒球联赛的决赛主场，也是日本高中棒球队最辉煌的一个向往，进入甲子园就意味着打进了全国决赛。而漫画甲子园，则是桥本大二郎任期内面向全国举办的一个动漫竞技场，在日本国内的动漫产业有着一定的影响力，已成为高知县的一道美丽风景。如今，漫画甲子园每年都吸引了爱好动漫的日本年轻人前来参加。

在谈到个人的爱好与兴趣时，桥本大二郎向记者表示：“我不像我的哥哥桥本龙太郎那样喜欢读书、登山、摄影、滑雪、游泳，这些他样样在行；但是，我也有我的个人喜好，比如喜爱我的老婆，也喜欢玩电游。”这位无党派政客最后一脸轻松地说。

本报北京 12 月 12 日电